



## <書評> 田林 明編著：『商品化する日本の農村空間』農林統計出版，2013年2月刊

著者	大石 貴之
雑誌名	地理空間
巻	6
号	1
ページ	65-67
発行年	2013
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/121315">http://hdl.handle.net/2241/121315</a>

田林 明編著：『商品化する日本の農村空間』農  
林統計出版, 2013年2月刊, 398p., 4,600円(税別)

本書は、日本における多様な現代農村の性格を、「農村空間の商品化」という視点から理解しようとするものであり、2007年から2010年にかけて行われた科学研究費に基づく成果である。編著者である田林は、これまで日本の農業・農村を「農業の維持システム」(田林, 2009)という視点から捉えてきたが、さらに近年の農村を「商品化」という新たな視点から捉えようとする試みは、絶えず変化する日本の農業・農村を統一的に把握する上で非常に重要な成果であるといえよう。本書では、農村をフィールドとして活躍している16名の地理学者が、それぞれのフィールドに関する商品化の展開やその意義について、自身の研究視点を交えながら紹介している。以下では、評者なりに本書の内容を整理して紹介する。

本書の構成は、3部24章からなり、まず第1章では序論として本書の研究課題が述べられ、加えて農村空間の商品化や、農村空間における商品の定義が整理されている。

続く第1部「農村空間の商品化の諸類型と地域差」では、農村空間の商品化にかかわる系統地理学的な課題について、Perkinsの農村空間の商品化に関する類型化を参考に、四つのテーマが取り上げられ、農村空間の商品化に関する現状が具体的事例や統計データ等を通じて概観されている。第2章「農水産物の供給」では、農水産物のブランド化や新品種の開発が農村空間の商品化の事象として注目できることが指摘されている。第3章「レクリエーション・観光」では、ルーラル・ツーリズムが展開される場所が大都市近郊農村か地方都市の近郊農村かという差異を念頭に置くことが必要であることが解説されている。第4章「都市住民の農村居住」では、農村地域の新たな担い手と

して都市からの移住者が地域社会の一員として機能できる整備が必要であると指摘されている。第5章「景観・環境の維持と社会・文化の評価」では、景観や環境を保全する地域の人材育成や資金調達、外部組織との連携といった課題を抱えながらも、地域の伝統を守ろうとする社会的・地域的基盤が農村空間の持続的な商品化に寄与してきたことが述べられている。そして第6章「農村空間の商品化からみた日本の地域差」では、以上四つのテーマを各類型として、日本における農村空間の商品化の地域差がまとめられている。

第2部「商品化する日本の農村空間の諸相」では、前章で提示された地域差をもとに、各地方を特徴づける農村空間の商品化の形態について、その実態と性格が実証的に検討されている。取り上げられた地域は北海道から沖縄県まで日本全国に渡っており、北海道の事例として第7章「北海道羅臼町・標津町における漁村空間の商品化とその地域性」が、東北地方の事例として第8章「阿武隈高地における農商工連携による地域活性化」が、関東地方の事例として、第9章「横浜市青葉区寺家地区におけるルーラリティの商品化」、第10章「茨城県笠間市クラインガルテンにみるルーラリティの商品化」が、中部地方の事例として、第11章「砺波平野におけるブルリアクティビティの展開と土地利用変化」、第12章「長野盆地における果樹によるアグリツーリズムの変容」、第13章「静岡市の石垣イチゴ地域にみる農村空間の商品化」が、近畿地方では、第14章「兵庫県佐用町南光地区の景観形成作物によるルーラリティの創造」、第15章「京都府旧美山町芦生地区における山村空間の商品化」が、中国・四国地方では、第16章「島根県江津市における空き家の利活用による中山間地域の維持・再生」、第17章「半農半漁村における農村空間の商品化」における宇和島市の事例が、九州・沖縄地方では、第18章「長崎における文化

遺産観光と農村空間の商品化」、第19章「沖縄の読谷山花織による地域振興」がそれぞれ述べられている。

そして、第3部「農村空間の商品化の意義と背景」では、農村空間の商品化に関して「都市農村関係」(第20章)、「農村の内発性」(第21章)、「社会経済的背景」(第22章)、「文化的背景」(第23章)を通じて分析し、第24章で結論として商品化する日本の農村空間の特徴をまとめている。

本書は、「農村空間の商品化」という視点のもと、丹念な現地調査に基づく実証研究が豊富に記載されており、特に第2部に挙げられる研究は、農業・農村の現状を把握し、また農村における今後の課題を考察する上で重要な示唆に富むものばかりである。また、第6章において農村空間の商品化にみる日本の地域性がひとつの図としてまとめられたことも大きな成果であろう。言うまでもなく、農村空間が「商品化」される内容は多岐に渡り、第1部で四つの類型に区分されているとはいえ、各地域における商品化の内容はそれぞれの類型が複雑に絡み合っており、ましてや日本全国を区分しようという作業は到底可能とは思えない。しかし、それでもひとつの図として提示できたのは、長年にわたって日本の農業・農村の実態を捉えようと研究を重ねてきた筆者らの地理学的感覚の鋭さによるものと評したい。

また、本書を読んだ評者の率直な感想として、「農村空間」を捉えることがいかに複雑で難しくなっているかということである。本書では、農村空間を「地理空間のうちの都市という性格をもつ以外の部分」と定義しており、農村空間が「生産空間」として捉えられていた時代からは明らかにその空間的領域が拡大している。これは、ともすれば「農村空間」という言葉が「なんでもありの空間」と認識されかねないという危険性も孕んでいるが、それを本書は、「商品化」という視点を

取り入れることで農村空間に一定の意義を持たせたと言ってもよい。そして、あえて一言付け加えるならば、「商品化」という言葉の使い方を考えねばならないという点を指摘しておきたい。本書では「商品化」という言葉が概してポジティブな使われ方をしているが、「商品化」の意味するものは実に様々であり、ネガティブな意味を持って語られる場面が存在するのもまた事実である。評者も含めた研究者にとって、この言葉の意味するところを十分に考えて使うことが必要であり、商品化に関する今後の研究の発展を期待したい。

以上のように、本書は現代の農村空間を捉える手法として「商品化」という概念が利用されてきたが、他にも農村空間を捉える視点は存在すると評者は考えている。よって、本書は「農村空間の商品化」に関心のある研究者はもちろんのこと、評者を含めた農業・農村を研究する若手研究者が農村空間とは何かを考える一助として一読をすすめたい。

(大石貴之)

## 文 献

田林 明 (2009) : 『日本農業の維持システム』農林統計出版.